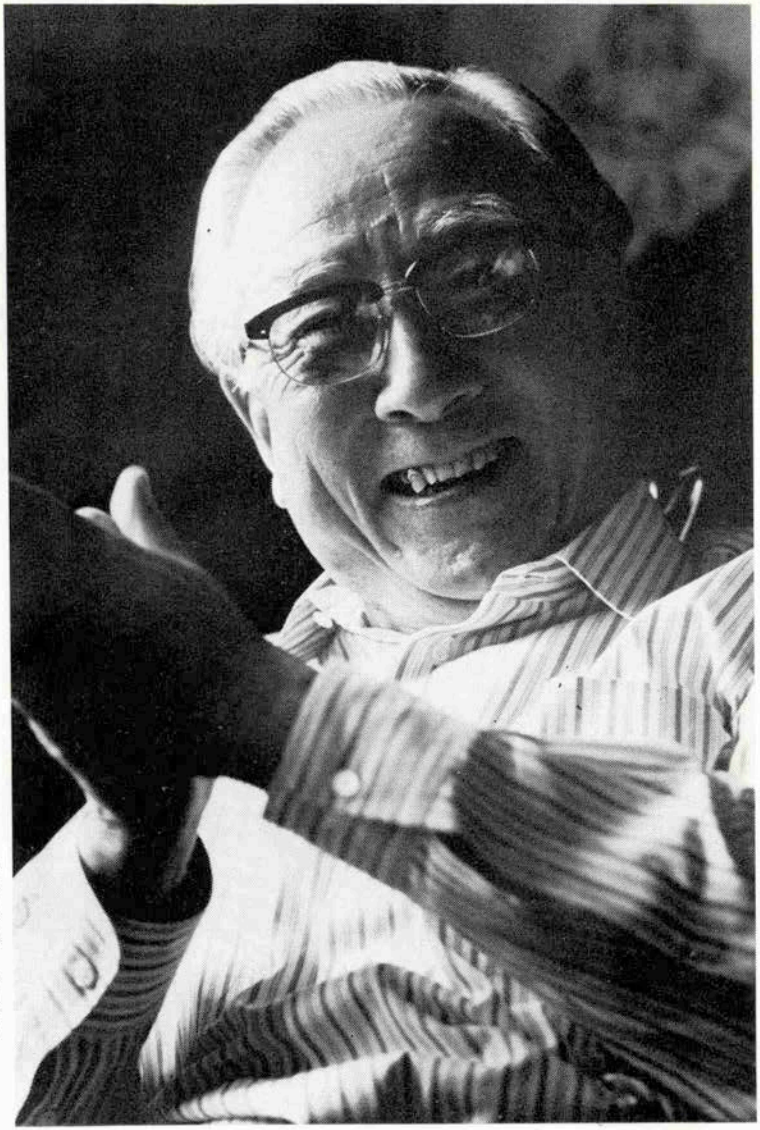
PEOPLE OF KOBE〈8〉

指揮棒ふるって四十年の音楽生活

朝比奈　隆さん

大阪フィルハーモニー常任指揮者

文・野口武彦〈神戸大学文学部助教授〉



▶朝比奈　隆さん

ベルリンフィル演奏会で（ベルリン音楽大学）　1958年。

間もなく開演時間になろうとする演奏会場の雰囲気、あの一種独特の不安定なエフェルヴェサンスが、わたしはたまらなく好きである。楽員たちはもうすっかり勢揃いし、方々で調弦の音が響いている。調子をためす管楽器のどことやら間のぬけた響き。コンサートマスターが立ち上がって、ヴァイオリンの調律音がひとすじ。しばらくの静寂。やがて聴衆の拍手に包まれて燕尾服の指揮者が登壇する。指揮棒一閃、するととたんにあるいは軽快に、あるいは重々しく、整然たる楽音の秩序、旋律と和音の流れる建築が滔々と動き出しはじめる。わたしはもとより音楽の世界には暗く、オタマジャクシには眼に一丁字なきやから、つねに指揮者の背後からしか楽曲に対してこなかった人間である。しかし、オーケストラの指揮者というこんな魔術めいた芸能をやってのける人物の警咳に接してみたいというのは、かねてからのわたしの憧がれであった。

朝比奈隆氏。明治四一年（一九〇八）に生まれ、京都大学法学部を卒業。のち同大学文学部哲学科に転じ、西洋美術史を学ぶ。生家は役人の一族で、父君は鉄道省の高級官僚だったという。周囲がこぞって官界に進むという家庭の雰囲気のなかで音楽の世界に自分の道を見つける。反逆などといったものではなくて、むしろ脱落という意識の方が強かったとは、当の朝比奈氏の言葉だがさるにてもまだ西洋音楽の開拓期にあった昭和初年にあえてこの道を選んだについては、氏の強烈な個性と意志とがはたらいていたというべきだろう。昭和十二年に、いまのN響の前身、東京交響楽団で指揮者としてデビュー、昭和一八年から上海とハルビンの交響楽団の指揮者を兼任、昭和二二年に関西交響楽団を結成、昭和三五年、大阪フィルハーモニーを組織、その間昭和二八年を手はじめに海外演奏旅行二〇回という朝比奈氏の輝かしいキャリアはよく知られている。ところがその朝比奈氏は、いうところの正規の音楽教育、音楽学校卒業の肩書きを持っていないのである。学校教育というものは一芸に達するための近道だ、と氏はいう。法学部から文学部へ、そして独学による音楽の勉強はいわば遠まわりの道だった、と朝比奈氏は淡々と語るのだが、そこにもやはり平均点主義とは反対のもの、もっぱら自己の個性にたよって進路を切りひらいてきた人間の信念がこめられていると感じられる。独学なるがゆえにかけられてきた人一倍よけいな時間、それが氏の場合、形式的な指揮法、指揮術

にこだわらず、その深奥にあるものをなまでつかむという芸術上の主張をつちかってきたのではあるまいか。

いまわたしは指揮者の個性ということをいった。わたしの音楽鑑賞体験などまことに貧弱なものだが、ひところボストンに在住のみぎり、演奏旅行で訪れてくる交響楽を聴きにゆく機会に恵まれて、ショルティ、クリップス、ベームなどのいわゆる巨匠たちを聴き、また若手ではブレヴアンや小沢征爾などの華麗な演奏ぶりに聞き惚れた、いや、むしろ見惚れたことがある。盲蛇に怖じずの議論であることはさらさら承知でいうのだが、楽曲の解釈というものは、これまたいささか我田引水の比喩ながら、どこか文学を批評する仕事に似たところがあるという印象を持った。文学は、その直接の形態としてはたんなる活字の羅列にすぎない。それにひとつの立体感を与え、生動するイメージの群運動にするのは一にかかって批評上の想像力である。それと同じように、楽曲もまず最初は五線譜上の楽譜の行列として存在するだろう。

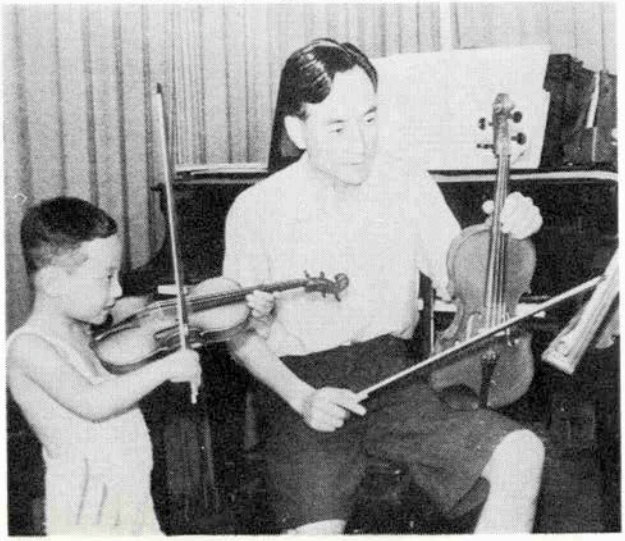
音楽はそのなかに潜在している。それに統一ある警きと力を吹きこみつつ再現するのが、指揮者の読譜力というものだろう。同じシンフォニーを振っても、甲の指揮者と乙の指揮者とではその印象が異なるのは、そこにそれぞれの個性が発揮されているからに他ならない。いってしまえばしごく当り前のことだが、そんなふうにまあ漠然と、わたしはオーケストラの指揮者というものについて考えていたのである。

しかるに朝比奈氏から直接お話をうかがうに及んで、わたしのいささか浅薄な常識はたちまち一新された。楽曲の解釈 interpretation 以前にまず、演奏というものはその楽曲の再現 realization なのだ、と朝比奈氏は言下に断ずる。たしかに自分にも若い頃には自分なりの好みでやってきた一時期もある。しかしいまはできるだけ自分の趣味や嗜好を排して、楽曲の客観的で妥当な根拠を求めていると氏は語る。氏自身の言葉には出なかったが、そのことは見かけの個性などはじつは指揮者個人のくせであるにすぎず、そのかぎりでは楽曲に対していわば「私」を捨てる態度がまず必要だというふうに解釈してもさしつかえないだろう。もちろんそれは、そうした指揮者としての基本姿勢の上に、独創性あるいは該博な知識が加味されてよいことを、なんら排除するものではない。

昨年五月の『オール関西』誌上には、朝比奈氏の音楽

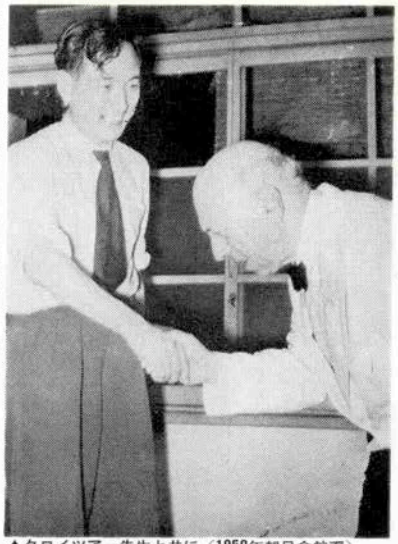
▲ハルピン交響楽団（昭和20年）

▼ご子息の千足さん（4才）と共に。（昭和23年）



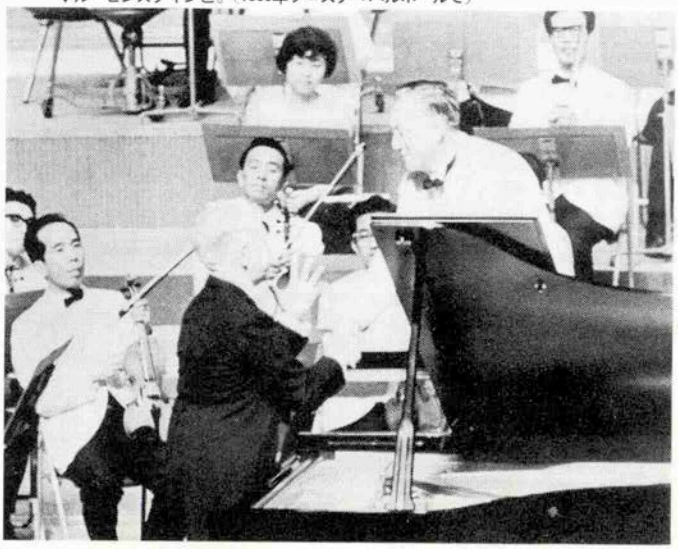
生活四十年を記念して、音楽評論家吉村一夫氏との対談が載っているが、その席上氏がこんな発言をしているのがわたしには印象的である。楽曲をつうじての時空を越えた人間精神の連携に言及しつつ氏はいう。「魔法ではなく、作品を通じて連携があるわけで、その連携を作るためには、なるべく爽雑物のない、原型に近いと思われるかたちを創り出すことです」。

原型に近いかたちで楽曲を演奏する。しかしそうはいっても、そこで現実に行われるのはさまざまなパートを受け持つ楽員たちの共同作業である。朝比奈氏は、力をこめて、指揮者なしではオーケストラの意志統一ができないと強調する。かつてロシア革命直後のレニングラード・フィルで、指揮者制度の撤廃が実際にこころみられたことがあるそうだが、数年でだめになった。破綻が起こることはないにしても、主体性が欠けてしまうということである。ひとつの楽曲がいきいきと再現されるためには、ひとりの判断、いわばヘゲモニーが要求される。個性ということをいうなら、楽員ひとりひとりが、ましてや手腕たしかな演奏技術を持てば持つほど強烈な個性の持ち主にちがいあるまい。それを一糸乱れずというか、楽曲の正確な再現のために「私」を捨てさせる能力。そこのところに総合的個性、あるいは超個性を引き出す力が要求されるのだ、ということが門外漢のわたしにもおぼろげながらわかってきた。これも月並な言い方だが、朝比奈氏の立場は技術万能主義とは正反対のもの、いってみれば人間第一主義なのである。



▲クロイツアー先生と共に（1950年朝日会館で）

▼ルービンスタインと。（1966年フェスティバルホールで）



最近の若い指揮者の間に見られる華麗なバトン・テクニック、棒ぶりの技術の流行に対しては、だから朝比奈氏はかなり手きびしい批評を下す。複雑なリズムをきざむ指揮技術の巧妙さそれ自体が悪いというのではない。指の動き方とか音の大きさとか派手なジェスチュアの背後に肝腎の楽曲がかすんでしまうこと、いいかえれば、頭脳の音楽の隆盛が胸臆からの音楽を見失わせることが、氏の批判の対象なのである。指揮者と楽員たちのつながりは、たんに音を引き出すだけの機能と機能の関係ではなく、人間と人間の関係である。その意味では、だれがどう弾くかはその場になってみなくてはわからない不確実なものである。たとえばひとつのシンフォニーが演奏を開始され、最終楽章のコーダが閉じられるまでの時間は、予測不能の事態と、それへの対処連続である。いくらリハーサルを重ねていても、本番の演奏で個々の楽員たちがどう反応するかは、あらかじめ予想のつくことで

はない。レコードという複製音楽になれているわれわれはともすれば忘れがちだが、音楽とはまさにそうした一回的なものであるがゆえに貴重な共通の経験であるというべきなのだろう。

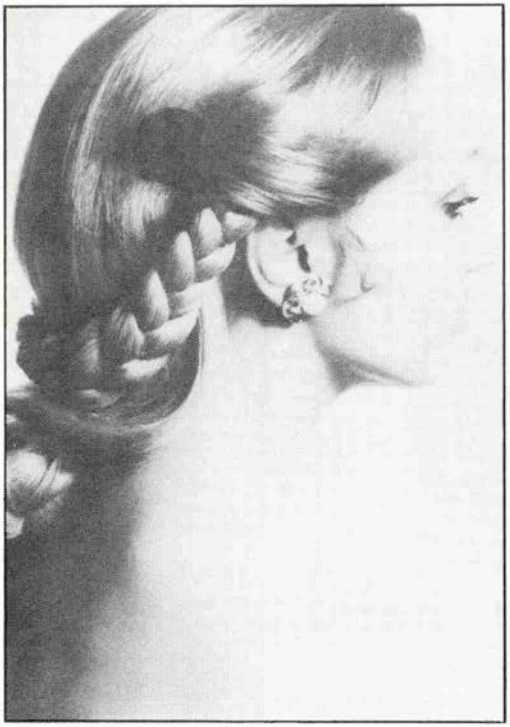
音楽家は、ただ音を出す部分品なのではなくて、生きた感情をそなえた人間である。ところで指揮者とは、それなればこそよけい精密で、時に脆弱でさえあるような「楽器」を演奏する音楽家であるともいえる。オーケストラを統禦するためには、強い意志の力ばかりではなく、文字どおりに楽器の琴線をなかだちになされる深い人間理解の力が要求されるのだ。かつて朝比奈氏は、古いベルリン・フィルの楽員に名匠フルトヴェングラーがなぜかくもみごとにオーケストラの心をつかむのか全員手足のように動くのかの秘密をたずねたことがあるという。くだんの楽員答えて曰く、ただ仕事場のドアを開けて入ってくれば、それでみんな安心するんだ。朝比奈氏はその言葉に思わず嫉妬を感じたという。美しい話である。指揮者意識を持つた、棒のさきでオーケストラを使うな、なかんずく、棒で譜面台を叩くような不愉快な動作をするな。これが朝比奈氏のモットーである。

私事にわたって恐縮だが、わたしはいつか或るディレッタントの友人からこんな話を聞いたことがある。柄にもなく某交響楽団の指揮者コンクールに応募したその男は、課題曲の「レノール」の序曲を振らされた。劈頭のF音のユニゾン。ところが指揮棒ひとふりで出るはずの音が出ない。ワンテンポ遅れてそれが出るまで、ふりおろす棒の重さといったらなかったという述懐である。もちろん彼はものの みごとに落選したのだが、この失敗談を披露したとき朝比奈氏が呵々大笑していわれたことに、——そういうたぐいのことはいまでもありますよ。指揮者はいつも無意識に音を待っているもので、わずか十分の一秒ほどのおくれでも棒は重く感じられるし、反対に早く音が出すぎると空を撲つような感じがするものです。そういう感覚はやはり経験のつみかさねで処理してゆくほかはないでしょうねえ。

40年の音楽生活の話はつきない（朝比奈氏の自宅にて）

経験。ひとくちに経験とはいっても、ここには音波の波動がそのまま筋肉感覚と結びついた態のみごとに肉化しきった経験の蓄積がある。よりいっそう精密な聴覚へと洗練をうながす耳が、ひるがえって音楽の聴き手の耳によろこびと感動として還元されてくる態の内的な体験のつみかさねがある。フルトヴェングラーにしても、ワルターにしても、アンセルメにしても、クレンペラーにしても、みな棒ふりは下手でしたと朝比奈氏が語るとき、そこには指揮の動作の華麗さがかえって聴覚への沈潜をさまたげることへの戒めと同時に、聴覚がやがては聴覚をつうじて達する深い内的感動——言葉の真の意味での音楽的経験にひらかれることに向っての信念が、説得力をもって語られているように思われる。真のモーツアルト・ファンはいかなる演奏を聞いても、そこに実際に演奏されている以上のモーツアルトを聴くという。朝比奈氏の力説する楽曲の原型の再現。それはまたオーケストラの聴衆が無意識に予感し、期待している「原型」に明晰な聴覚のかたちを与えてくれる音楽的想像力のダイナミズムなのである。

誰のために……？



株式会社 美容室 **エリザベス**

本店　三宮神社北東三上ビル２Ｆ　TEL.331－8894・4917
芦屋支店　芦屋市阪神芦屋駅山側　TEL.0797－22－4067
専属結婚式場 生田神社会館・オリエンタルホテル・阪急六甲山ホテル・蘇州園他

花嫁衣裳サロン　東京初代遠藤波津子直流 畑尾芙久子の店
お貸衣裳部　生田神社前通　TEL. 331－3258

べっ甲美術品とアクセサリーの専門店
太田鼈甲店
元町１丁目　ＴＥＬ(331)6195

「神戸っ子」と逢える店

次のお店にも月刊「神戸っ子」をおいていますので御利用下さい。

美容室井上（多聞コーポラス一階）
アトリエヨシコ（トアロード）
元町画廊（元町穴門筋）
阿以子（生田神社西）
あかねや（三宮・日生ビル浜側）
蝦夷（東門筋東門会館一階）
グラムール（三宮・岸ビル地階）
くる実（東門筋北角）
さち（三宮・伊藤ビル二階）
シルバームーン（生田神社西）
デキシーランド（フラワーロード）
ヌベール（三宮）

★座談会★

愈々漫画集出版

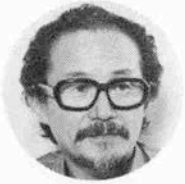
たかはし・もう

小泉康夫（本誌編集長）

佐藤　廉（元町画廊）

中西　勝（画　家）

たかはし・もう



小泉　神戸新聞の「笑点」などでおなじみの漫画家のたかはし・もう（高橋　孟）さんが、来年三月末で神戸新聞社を停年退職されます。また、三月十三日はもうさんの五十五歳の誕生日でもあり、もうさんをよく知っていらっしゃる方々が中心になられて、これを機会にもうさんの漫画集を出版しょうということで目下発起人会をつくられています。そのへんのお話を伺いたいのですが……。

★画きたいものはようけある

佐藤　中西（勝）君がいいだしぺぇの中心で、われわれ発起人がもうさんをかつぎ出しているんだ。

私が考えている漫画集の内容はまず、もうさんの半生、おい立ちから海軍時代、神戸新聞時代の世相を漫画にしたもの。おい立ちから現在までをもうさんの眼を通してみたもので、五十五歳の人がみてその漫画から想い出を引き出せるもの。

それと、もうさん自身を中心として、テーマを決めて経験を綴った漫画。また、最近作としての作品をカラーで収めたい。

もう一つは、神戸新聞の「笑点」。ただ、これは選択が非常に難しい。出たその日には面白くても時間がたってしまうと果してどうか……。もちろん、ズレを並べるこ

との面白さはありますが……。しかし、もうさんの眼を借りて時代を追うのも面白いでしょう。説明を入れないとボヤけてしまうだろうが。

中西　漫画家生活の中の代表作というと「笑点」ですね。

佐藤　これはもうさんからみた歴史なんだね。

もう　私は海軍生活を終えてから似顔絵描きになったんですが、これまでにアレやコレやと職を点々としていましてね。今、新たに画こうと思ったらようけありますね。

佐藤　「笑点」はまた別の機会でもいいでしょうね。「笑点」記録号にしてもいい。

★期待できるもうさんの似顔絵

中西　十五年位前にもうさんが神戸新聞社に入った頃から、私はもうさんに漫画集を出したり、展覧会をやったらどうや、といってきたんです。絵画からショックを受けるんだから漫画からも受けるに違いない。だけど、もうさんは、いや、ワシャ、今はその時期やないといい続けてきた。会うたびにすすめて来たんだが、十五年間駄目だった。ところが昨年になって、ワシも五十五や、絵画きとして息子やおやじや嫁さんにエエ線出したい思うようになった、ということで、やっと願いをきいて頂いたわけで喜しくなりましてね。やっと腰を上げたと。

　私は今までもうさんの人間を、作品を非常に尊敬してきました。だから、ここで初めてもうさんの画集ができるのは嬉しい。もうさんの眼を通してみた、社長連中やクラブのマダムや友だちなんかの似顔絵は、これまでのもうさんの蓄積の実りとして期待できます。

　それと、似顔絵を集めて展覧会をやることですね。たとえば石野（成明）さんの似顔絵を画き、漫画集に入れ、展覧会をやり、ご本人に買ってもらう。さらに出版記念パーティ。これは発起人でシナリオをつくって、神戸初って以来の大パーティにもって行きたい。

佐藤　その場合、もうさんが漫画家だということが大事なんだね。漫画家はユーモアをもって政府や社会を風シするんだが誰も怒らない。だから誰かを中心にして集まるにはもうさんがもってこいなんだね。悪いいい方だが、もうさんにダシになってもらって、神戸らしいパーティをやりたいですね。

　神戸らしいものをやるには漫画家がポイントになる。画家、小説家、いずれも人生は漫画なんだ。発起人のなかに入ってなかったら恥しくなる程になるなら面白い。だからといって何ももうさんが構える必要はないですよ。今までのもうさんでいいわけです。総決起パーティへもって行きたいね。漫画は庶民のもの。どこのえらいさんでも漫画になれば皆同じなんだ。

中西　自分のやりたいことをもうさんに託しているようですね。

佐藤　漫画なんだから、クソまじめになる方がアホかいなとなる。もうさん、来年は自分のなかのオリをぶちまけたらいいんですよ。

もう　えらいことになってきよるね（笑）。

★もうさんの似顔絵、愈々登場

小泉　もうさん自身は漫画集をどう考えられますか。

もう　似顔絵だけの本も出ていますので、財界人など百人の似顔絵をやろうと。それをいっぱつ出してから漫画で私の歴史というものを出そうかと思っているんです。

小泉　いずれにしても、もうさんを中心にした神戸っ子総決起大会となるようですね。漫画は庶民のもの。それを神戸っ子があげて応援すること。

　出版については私の方で充分検討をして前へ進めるように考えます。それで早速九月号から月十五人の割で似顔絵を「神戸っ子」に連載して貰う予定です。とにかくたかはし・もうさんのためにも後世に残るようなものを編集したいですね。（於　本誌編集室）

神戸のアーバンデザイン ⑧⑨

《新旧比較シリーズ ⑥》

ホール　今と昔の対比

水谷穎介＋チーム・UR

▲旧商工会議所

▲神戸文化ホール

●歴史的建築物の様式、材料仕上、たたずまいというものと、新しい現代建築のそれが、いろいろな角度から対比されて論じられる機会がぐっとふえてきたようです。一般の人と専門の人、素人、玄人を問わずの傾向です。古い様式を打破り、機能的・合理的目標を追いかけることにただ一筋だった近代建築にも昨今いろいろの限界が見えてきたからです。

●まず「様式」というものに対する評価が再考されだしました。人間の心に語りかけ続けるものは何か、また街並みの構成を支え、コミュニケイトするものは何か、という側面を考えていきますと、白い四角いすべての飾りをはがしてしまった現代建築の群というものに、大きな不満が感じられるようになってきました。「時間」というものに対する価値を実感するようになって、「古い」ものと「新しい」もののウエイトづけは簡単には出来なくなってきました。古いもの、例えば、日本の木造の民家はすでに100年以上、いや350年ぐらい経っていてまだまだ立派で、使い続けていけるものが沢山あります。あと少々時間が経っても、今とほとんど変らないでしょう。最近の新しいもの、これらの30年後を予想してみて下さい。現時点では出来たてですからそれなりにツルツルピカピカしていますが、老化していくのが極めてはやそうなのが気になります。30年たてば、いままで100年使ってきた住宅の方はまだしゃんとしていて新しいもののほうがダメになってしまうということになりそうだというわけです。それなら古いものを大切にして、少々の不便をしのいでも新築は急がない方が賢明ということになります。

●もう一つ、材料と仕事の要素があります。歴史的材料は、自然のもの、ほんもの、時がたつにつれて美しくなっていく材料、それに対して昨今のものは、人工のもの、表面加工のもの、時が経てばすぐ疲労してしまうものがあまりにも多く、しかも工業化・量産化の影響をうけてその施工の仕事は一段とダウンしています。普通の材料、手近な材料をこつこつと努力して、愛情をもってつくってきた「手」の仕事の支えが極めてむずかしくなってしまったのです。　（水谷穎介）

神戸のモダーンリビング ⑧⑨

石阪春生氏の町の中のアトリエ
《新しい町屋 ⑧》

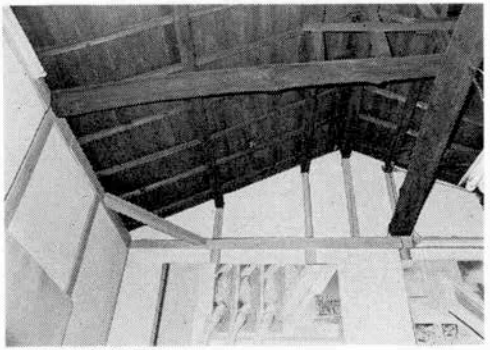
水谷穎介＋チーム・UR

●このアトリエは、兵庫弁財天厳島神社のそばに建っています。近くには、元弁天小学校、落ち着いたたたずまいを見せる現兵庫小学校があります。あたり一帯は、自家営業的なお家が多く、かつての歴史的な下町の雰囲気が伝わってきます。水かけ不動さんがアトリエの裏にあります。

●このアトリエは、ここで100年近くお商売をつづけてこられた粉屋さんの元倉庫です。角の敷地600㎡のなかに、お商売の場としての倉庫と事務所、御両親のすまい、このアトリエの主の家族の住宅が配置されています。もとは今の家族の住宅のところがアトリエだったそうですが、倉庫の広さと天井の高さなどが絵をかく作業の要求にこたえてくれるので、こちらへアトリエを移されたそうです。このあたり一帯は戦災で焼けたので、建物はもちろん戦後のものですが、杉の三寸五分の柱、小屋組、土壁しっくいの真壁など戦後すぐの物の無い頃の質素さをうけての職人さんの真面目な仕事ぶりが感じられて、近頃の人工材料と心のない加工建築に比べてふっくらした気持ちになります。最近の地価に対比させた巨大な新築に移行していく道をとらないで、特別の名建築ではなくてもこういう古い建物を大事にして住みつづけてきた町への思いやりをもって使いかたを創造していく姿勢こそ生活文化の基本だと思うのです。

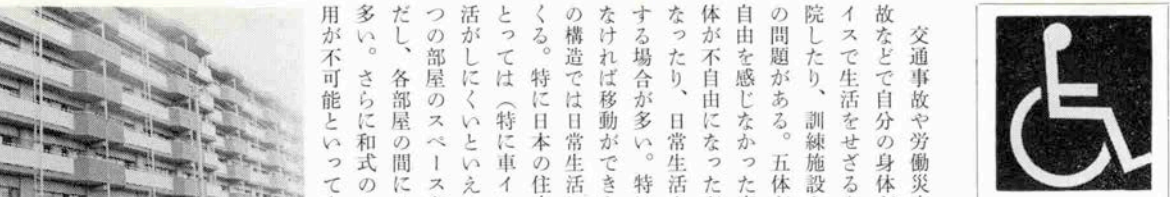
●まだ使いきっていない倉庫の部分などを生かして自分の小さな美術館にする希望をもっているというお話でした。その時の2棟の倉庫の間の小さな中庭の使われ方が楽しみです。（水谷穎介）

▲同じデザインの倉庫が2棟並んでその間に小さな中庭がある



▲元粉倉庫の小屋組

▲オイルステイン仕上の小屋組・ベンキ塗の柱・しっくい真壁のアトリエ



☆神戸を福祉の町に〈8〉

身障者向公営住宅

橋本　明

上のマークは車イスで使用できる箇所にはられる国際シンボルマークです。

交通事故や労働災害、あるいは病気や思いがけない事故などで自分の身体が思うように動かなくなったり、車イスで生活をせざるを得なくなった人たちが、病院を退院したり、訓練施設から退所して困ることの一つに住居の問題がある。五体が思うままに動いている時は何ら不自由を感じなかった家屋の一つ一つの設備や構造が、身体が不自由になったがために今まで通り使いこなせなくなったり、日常生活を営むことが非常に困難になったりする場合が多い。特に下肢障害となり、車イスを使用しなければ移動ができないような場合は従来の設備や家屋の構造では日常生活に非常な支障をきたすようになってくる。特に日本の住宅は欧米の住宅にくらべて身障者にとっては（特に車イス使用者にとっては）構造上大変生活がしにくいといえる。たとえば、日本の家屋は一つ一つの部屋のスペースが狭いうえに畳は車イスには不向きだし、各部屋の間には障子やフスマの敷居があり、段も多い。さらに和式のトイレや風呂は車イス使用者には使用が不可能といってもよい。この点、広くて段差の少ない欧米の住宅は車イスでも比較的生活がしやすいようである。

建設中の吉田第二住宅。一階の7戸が身障者用

病気や事故で身体が不自由になった人たちは退院してまずこうした自宅での生活の不便さに直面せざるを得ないが、それぞれの障害の部所や程度に応じて、設備が使えるように訓練や補助具によって自分の身体を適応させていくか、それが無理な場合は住宅の一部あるいは全部を使用しやすいように改善、改築することになる。

たとえば、宗和タキさん（58）は三年前脳血管障害で倒れ、右片麻卑で自由がきかなくなったので兵庫県立リハビリテーションセンターに入院し、一年ほど機能訓練をうけて今年の四月から須磨区高倉台の自宅で療養生活をすることになった。宗和さんは倒れる前に今の3LDKの分譲住宅に入居が決まり、まだ工事前でもあったので夫の竹二さん（66）が業者と交渉し、風呂場やトイレなどをタキさんが使用しやすいように多少の改善をしてもらった。

宗和さんのお宅を訪ねるとタキさんはベッドから起き上り、機能訓練になるから、と車イスを使わずにつたい歩きをしながらいろいろ話をしてくれる。竹二さんに部屋の中を見せていただくと、部屋と部屋の敷居の段差をなくす工夫をしたり、風呂場の洗い場にスノコを張り脱衣所との高低を減らし、湯舟の横には手摺りをつけてある。しかし湯舟が高すぎるので風呂に入る時は竹二さんがタキさんの身体を背後からかかえて、足を持ちあげないと入れない。お年寄りのご夫婦にはなかなか大変なことだ。トイレも手摺りをつけ、トビラは開き戸につくりなおしてある。以前は部屋のあちこちにも手摺りをとりつけていたが、狭い部屋にはかえって邪魔になるので取りはずしたそうだ。改造費は全部で九万円ちょっとかか

ったが、もちろん全額自己負担。

しかし、宗和さんの場合は改造の申し入れをしたのが工事前だったので多少とも改造できたが、完成後だと住宅金融公庫に残金を返却する30年間は住宅が担保に入るため改造はできなくなってしまうという。持家の場合は問題はないが、一般の民間の借家や公営住宅の場合は不便であってもまず改造は不可能だ。

そこで最近、特に車イス使用者用に特別な設計をされた心身障害者向けの公営住宅が各地で建てられるようになってきた。今までにも心身障害者用住宅としては特定目的住宅というのがあったが、これは心身障害者に対して優先入居をさせるだけで、住居そのものには何ら特別な設計はされていなかった。

神戸市の場合も昭和47年度の建設の分までは心身障害者向公営住宅は優先入居させるだけで設計上の考慮はされないままだったが、ようやく昨年から車イス使用者を対象にした、特別設計による市営住宅の建設が始められた。まずテストケースとして神戸市垂水区玉津町吉田に現在建築中でこの九月完成予定の吉田第二住宅一三一戸のうちの七戸がそれだ。もちろんこの市営住宅は一般健常者を対象として建てられたもので、一階の七戸分が車イス使用者用として設計されている。他の市営住宅と設計上異なる所は、車イスの通路として建物の周囲にスロープのアプローチを設け、玄関扉は車イスでの開閉に便利なように片引戸とし、出入口の段差をなくしてある。内部ではまずサニタリー・ユニット(便所、洗面所、浴室)を一つのセクションにまとめ、要所要所に手摺りを設けて車イスで使用しやすく設計されている。居室は和室と洋室の二間があり、洋室から和室へ車イスからずって移動できるよう、両方の高低差は45cmになっている。台所の換気扇やスイッチの高さは車イスから手が届きやすいよう工夫されているが、ただ調理台は既製品を使っているため少し高すぎるし、また下部が開いていないため、車イスでは前がつかえて使用しにくいのではないかとも思われる。もっとも、同居する健常者も使用することを考えればこれでそう不便なことはないかもしれないが。

玉津の身障者向住宅平面図

とにかく身障者用住宅といっても、そこに住む身障者の障害の種類や程度はまちまちであり、家族構成もそれぞれ異なるので単純にユニット化できないところにこの種の住宅設計の難しさがある。ただ、車イスに限っていえば、車イス使用者にとっては、最少限これだけの物理的、空間的条件があれば何とか困らない、といった最大公約数的な基準があるので、設計する段階で最少限その基準を満たすようにし、あとは個々人の障害に応じて、補助器具などの利用でそれぞれ生活しやすいように工夫していくのがいいのではないだろうか。

さらに身障者用住宅を設計する場合はその住宅だけを切り離して考えるのではなく、その住宅を含む周囲の環境、たとえば身障者用の駐車場をかならずつくること、ショッピングセンターや市場、集会場、公園などの公共の場には、車イスでも出入りできるようにすること、交通が便利で安全な場所に設けることなどももちろん考えておかねばならない。そうしないとせっかく一緒に住みながら身障者だけが孤立した生活を余儀なくされるからである。そのため、外国(たとえばアメリカ、イギリス、カナダ、フィンランド、オーストラリア、ベルギー、ノルウェー、ポーランド、スウェーデンなど)では、身障者に対しての配慮がなければ新しい公共建築物の計画は許可されない。

わが国でも建築基準法にぜひこうした基準を設けて身障者も含めた新しい住宅づくり、環境づくりをぜひしていきたいものである。

●奇術師アフリカの旅

高原の国エチオピアをゆく

福岡　康年
〈アフリカスペシャリスト〉

エチオピア北部のエリトリア地方の首都、アスマラから首都アデスアババまで約一三〇〇キロをヒッチで行く事にした。ヒッチの成否はなんといっても車の絶対量が最大の要素である。ところがこの道路、バスを除いて、ヒッチ可能な車は一日多くて4、5台しか通らない。二日目など朝10時から午後4時まで、1台も来ないのだからどうしようもない。ヨーロッパのヒッチハイクなら、待つ時はちゃんと道路脇に立って車を見張る必要があるが、ここではそんな事は必要ない。道路の近くにある草むらにリュックをマクラに澄みきった青空に輝く太陽をあびながら鼻ちょうちんを作っておればよい。あたりが静かで聞えるものと言えば、遠くでなく「モー」か「メー」か「クワクワ」(ロバ)の声だけ。だから車のエンジンの音は数キロ先から聞えてくる。来よったなと目をさましタバコを一服して立上っても十分まに合う。そしてノコノコと道路の中央に行けばよいのである。そして見える頃になると、道路の真中に立ち、両手をひろげて車をとうせんぼするのである。ヨーロッパと同じ要領で、道路の脇に立ってサインを送るなどとなまやさしい方法ではダメである。見過されてしまえばそれまでで、その後何時間待たされるかわからない。いかなる事をしても来る車はバス以外は、警察の車であろうと、軍隊の車であろうと止めるのである。大型トラックの荷台に運転席を切り離したトラックを積み、その荷物としてのトラックの荷台にフォルクス・ワーゲンを積んだ車をヒッチしたのもそのうちの1台、いや3台である。親亀の背中に子亀を乗せ、子亀の背中に孫亀をのせたその孫亀のキャピンが私の乗っている場所。走っている間は快適であるが、尿意をもよおすと困るのである。大声でどなって、車を停車させ、三階から地上の楽園まで降り、仕事をすませてまた三階まで。エレベーターもエスカレータもあるわけではないので、それだけで10分もかかる。おまけに、その度ごとに、手、足等に二、三ケ所のスリ傷、切り傷ができる。たった一日で10ヶ所以上もの傷を作り、そこら中バンソウコウをはったみっともない姿になる始末。こんな苦労も6日目にアデスアババに着いたとたん、ようアホらしい事をやったと感じると共に楽しい思い出となった。ちなみにバスに乗っておれば2泊3日で経費も安上がりであった。

アデス・アババは海抜約二四〇〇メートルというから

六甲山の二・五倍以上もの高さに位置する。アフリカの首都らしく近代的なビルの間を、羊の群を追うハダシの少年の姿が見られる。坂の多いこの街は少し歩き回るとすぐに胸が苦しくなるので、歩きを身上とする私は二回もひっくりかえった。

さて、アスマラで、ナイトクラブとかテレビで思わぬ大金をかかえ込んだ私は、このエチオピアドルをなんとかしてこの国内で使ってしまわなければならない窮地に追込まれているのに気が付いた。せいぜい無駄使いする事である。それなのに泊るホテルは足の方が最低のホテルに身体を運んでしまう。一泊、ノミ、シラミ、南京虫付でわずかの二百円。これではお金がへらないので困る。部屋に案内されたが、ドアーの錠前がピン一本で開けられそうなものなので、まず錠前を一番大きな物を買って来させた。室内に入ると電灯が暗い。40ワットを100ワットに交換させた。数年前は白かったのだろうと思われる黒っぽい灰色のテーブルクロスを、真白なものに買い換えさせた。その他気に入らない物を次々と買換えさせた。費用はもちろん自費である。なにしろ金が余っているのである。その度ごとにボーイにチップをやる。

チップの額は一回五円。こんなホテルに働いているボーイ、女中は口べらしの為に働いているので通常、寝て食べさせてもらうだけで給料はもらえないので、この5円は彼等にとっては貴重である。部屋の中でひっくりかえって、何かあれば、ポンポンと手を打つと、4人のボーイと2人の女中が競争で私の部屋に走込んで来る。一着賞金5円である。こんな安宿でこんなに度々チップ出す客は初めてであろう。ハナガミがテーブルから落ちた、ポンポン。ハイ、5円、ポンポン、ラジオを消してくれ、ハイ、5円。なにしろ王様の気分である。

そんな王宮でおもしろい情報を耳に入れた。ブラック・マジッシャンがこの街にいるという。今までアフリカで、何度もそんな噂を耳にしたが、今度のは違う。場所と名前がわかっている。やっている内容は別に変らない。得意とする所は、白紙を呪文と共に紙幣に変化させる術である。その他バカげた内容のものを5点。チャンス到来である。私は4人の学生を集めて、その魔術師とインタビューさせてくれれば25ドルの賞金を出そうという約束をした。白紙を紙幣に変化させる術はアフリカで最もポピュラーな魔術であるらしく、方々で耳にした。私が彼等の目の前で同じ事をやっても、どうしてそうなるか、タネはわからないのが奇術であり、魔法使いのやるのはタネがないと断定する。最近の超能力に対する一部の日本人とまったく同じ発想である。それから三日目、彼の所に行き彼と会ってきたと報告を受けた。「彼と会えるのか」ときくと、その学生は残念そうに「お前には会いたくない、といっている」と言う。せっかく見つけた大特ダネを逃がしたが、ノコノコとずうずうしくテレビに出て来るインチキ超能力者と比べればなんと正直なことか。

貧しいが朗らかなエチオピアの子供たち

神戸遊戯誌

〈最終回〉

“遊び”の哲学／青木重雄

カット　貝原　六一

今日ほど大人の〝遊び〟というものが、真剣にまた楽しく論じられ、徐々にその本来の目的が社会的に実現されつつある時代はあるまい。筆者自身本誌に長年にわたって「神戸遊戯誌」というシリーズを書かせてもらい、このことを痛感したものである。それにしても過去何百年にわたってわが国では遊びという人間本来の姿がなんとゆがめられて解釈され批評されてきたことであろうか。たとえば、勤労精神が最大の美徳としてあがめられ、推奨された封建主義の長い時代には遊びが必要以上に怠惰の行為として排斥され、ののしられてきたものだった。戦前、戦中、小学校などの庭に据えられた二宮尊徳像崇拝の考えそのもの全部が悪いということは絶対ないが、日本の指導階級があまりにも「汗して働く」ことのみを最高の美徳として国民に強制した結果、遊びそのものの解釈についてずいぶんあやまった考えが行なわれてきた。

ところが、戦後は経済成長と文化生活の向上につれて、遊び（レジャー）を充分な心の余裕をもって眺め実現することができるようになった結果、徐々に遊び本来の価値と使命が復権され、同時に各企業体も勤労者の休日をふやすことを前向きに検討するようになった。なかには欧米なみの休日を与える企業体や他方では遊ぶことのみに社会的意義を認めようとする考え方の若者たち（ヒッピーなどもその一つだろう）まで多く現われるようになったため、これも勤労主義の逆の意味の一種の行き過ぎと批判される傾向まで出始めている。いずれにしてもわが国における遊び（レジャー）はやっと近代的な照明を当てられて影のない赤裸々な姿を浮かび上がらせて来ていることは疑う余地がない。とりわけわが神戸市（市民）は海港都市の強味から、いち早く欧米の遊びとスポーツを輸入しそれに同化した結果、明治から大正、戦前昭和へと近代的な遊びのよさと楽しさをまねることによって、他地方の人々よりも早く今日の日本全体の諸遊戯の実現と普及に尽くしてきたことは事実である。

さて、現代では遊びの権利を正面から一種の悪い行為として排するような考え方、あるいは白眼視する後ろ向きな考えを有意義と信ずるような人はほとんどないと思われるが、この機会に遊びのもつ本能的な姿と人生における役割り等について、いわば「遊びの哲学」ともいえることについて次ぎに触れてみたい——。

まず遊びを最も近代的な観念でとらえた西欧の思想家は十七世紀のフランスの哲学者パスカルであろう。天才的科学者と評される半面同時に熱烈なキリスト信者でもあった彼は、ようやく世の風潮である啓蒙思想を身近に感じながら、すぐれた知性と感覚でキリスト教自体にも近代的な批判を試み、神と人間そのものへの深い懐疑の底からかの有名な「人生は神へ賭けるか遊びへ賭けるか二つのうち一つしかない」ということばを発した。つまりこれは人間は本来神すなわちキリスト教を絶対信ずるか、それとも人生の毎日を遊びに賭けることによって自分自身をごまかして生きるかの二つの生き方しかないという意味である。この主張はむろんキリスト教者であった彼自身の神への絶対信頼と反対に遊びを悪と断ずる考え方の告白に他ならないが、遊びの行為を冷たく排しながらも、半面人間の遊びへの執着と情念がいかに根強いものであるかということを、その頃までにないきわめて

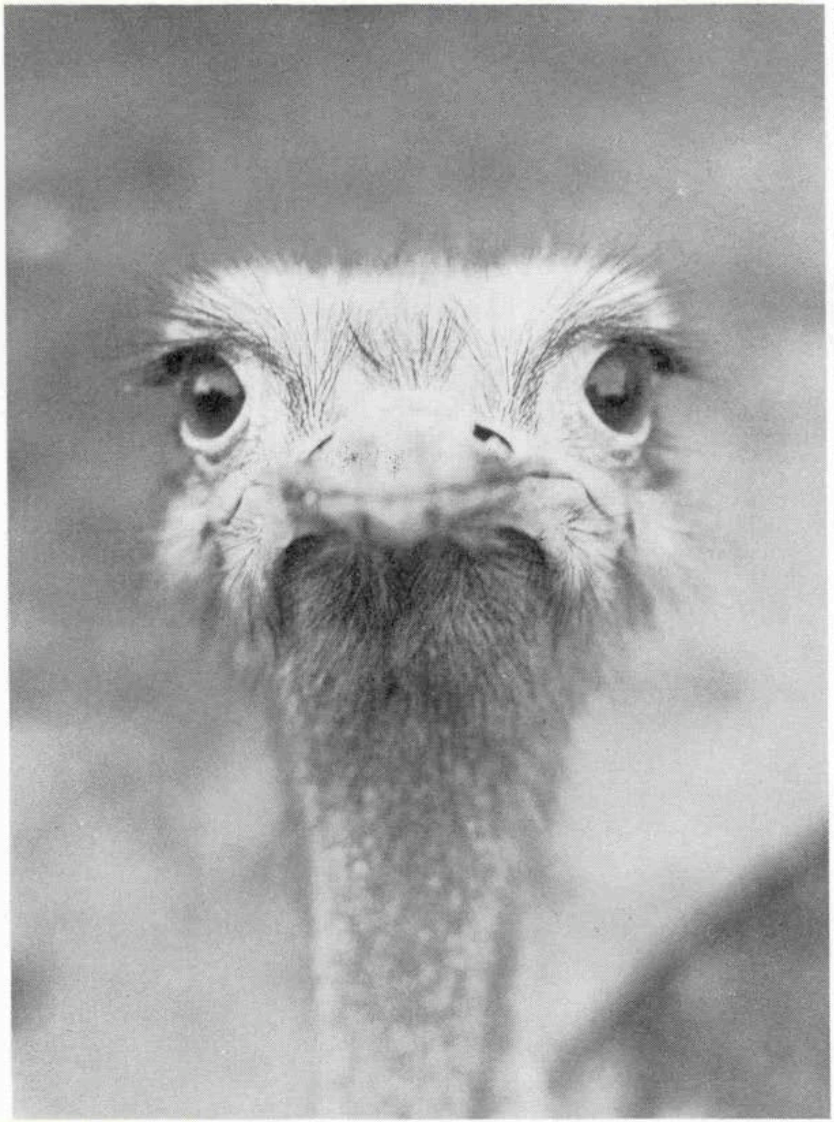
啓蒙的、近代的な知性でとらえている点を見逃がすことはできない、すなわちパスカルこそ人間の遊びの行為を最も近代的な思惟でとらえた最初の思想家であり、以後現代へかけての多くの哲学者や文芸思潮家などに人間そのものや遊戯の価値論などの問題についてきわめて有意義な幾多のヒントを指示した人間学の先覚者といえよう。つづいて十九世紀から二十世紀へかけてオランダの歴史家ヨハン・ホイジンガが現われて遊びのあり方について価値ある提言を試みた。彼は「ホモ・ルーデンス」(遊ぶ人)という著書によって人間の遊戯心をパスカルよりもはるかに前進した形で解明したものだ。彼の考えは次ぎの三つのことばによく表現されている。「すべての遊びは、まず第一に何にもまして一つの自由な行動である。命令されてする遊び、そんなものはもう遊びではない」「遊びはそれの固有の傾向によって、日常生活から、ある一時的な活動の領域へと踏み出してゆくものである」「人間は子どものうちは楽しみのために遊び、まじめな人生のなかに立てば、休養、レクリエーションのために遊ぶ。しかし、それよりもっと高いところで遊ぶこともできるのだ。それが、美と神聖の遊びである」……遊びが社会生活のなかで占める重要な役割りが戦前、戦中などと違って色めがねなしに正しく、しかも文化的に取り扱われつつある今日では、これらのことばはきわめてあたりまえのように解されようが、当時としては革新的なことばであったことは事実である。ことに西欧諸国以上に長い世紀遊びについてあやまった、また後進的な考え方にとりつかれていたわが国民にとっては、今日でもまだまだ傾聴にあたい(価)する内容のものである。表面的には「レジャーだ、余暇だ、遊びだ」といわれていてもその実際面のうえでは、なお多くの問題を含んでいることが現代社会における人々の遊びの諸相に認められることは否めまい。

人間の基本的な人権がかなり理想的に法文化されているわが国では、遊びの必要は正しく認められるようになり、今日ではもはや遊びについて〝罪悪感〟を抱くような人はいないと思われるし、レジャーとスポーツについても各種の施設は増加の傾向にあり、会社の休日も正しくふやされつつあるようである。ただし、このことも一朝一夕に改善されることを望むのはムリで、まだまだ反省されねばならぬ点が見いだされる。各種スポーツやレジャーが商業主義によって毒されている事実は各所に指摘されるし、「百万人のスポーツ」実現のためにはなお球場難であることも困ったことだ。こどもの遊戯場の貧困な現状にいたっては一種の社会問題とすら考えられてよい。大人のためのゴルフ場ばかりがふえてこどもの健全な緑の広場が少ないようでは、健全な文化国とはお義理にも言えない。そういう意味では、ホイジンガの「ホモ・ルーデンス」を正しく実現するためには、われわれに与えられた課題はなおあまりに多く、この本の持つ意義は決して失われていない。

同書の中で「高いところで遊ぶこともできるのだ。それが、美と神聖の遊びである」といっているのはことに興味深いが、これは他の箇所で彼が「詩も最高の遊びである」といっているのと同じ境地を示しているもので、遊びが単にスポーツや観光ばかりをさすものではなく、芸術や趣味、さらに自由な心境なども含むことを意味している。

その一例としてホイジンガが日本の俳諧をとりあげ、俳聖芦蕉の「もろもろの心柳にまかすべし」という句を引用しているのは心憎い限りである。人生のまじめな面はあくまでまじめな面として受けとりつつ、同時に自由奔放な境地に遊ぶ心、これこそ遊びの極地といえるわけだろう。

最近日本は情報時代から情緒時代に移りつつあるといわれている。遊びの意味が今日ほど徹底的に究明される必要のある時期はあるまい。(四九・六・十記)



ないしょ話シリーズ〈20〉

動物園飼育日記——99——亀井一成

ダチョウ小屋の秘密

夜行性のフクロウやヨタカは例外としても、鳥類はあわれな〝トリ目〟だといわれるが、夜でも人間ぐらいの視力は充分にある。身の危険つまり〝殺気〟に、彼等は深夜でもすごい勢いで飛び立つし、飛べないダチョウですら長い首をつきたてかたまっているため、寝こみを襲うなどとうていできない。

かってのこと、どうしても馴れてくれないダチョウ一家のボスに業を煮やした私は、ひとつ寝こみを襲ってやれと深夜、しかも黒装束、こっそりそのダチョウ舎に入りこもうとしてひどいめにあったのである。

それは旧諏訪山動物園当時の大長老飼育技師吉岡長次郎氏から飼育実技の〝極意〟を教えられていたときのこと。どうしてもダチョウ小屋内部をこの眼で確認したい事情が起こった。

吉岡さんはもの静かでコツコツタイプ、動物の排せつ物でさえ、ときには平気で手掴みする。暇さえあればオリの中に入っているという、〝膚で世話〟するお方だった。

勢力によって身分の高いダチョウや低いダチョウがいます。

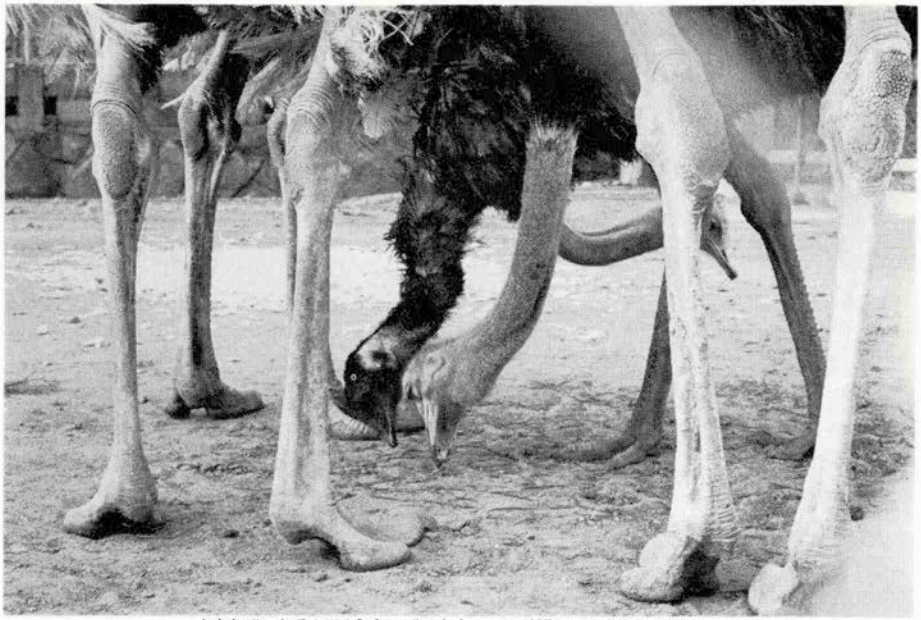
しかしながらたったひとつ、その長老にも楽しみがあった。彼は何よりも酒がすきな左党派だったのである。草刈カマ片手に園外に出ては帰り道、ちょっと一パイひっかけてこなくてはすまされない。それがたび重なるうち、うるさい世間さまの眼にとまり、私の小耳にも入ってきた。と同時に今度は、続いていた草刈出張が、何故かとだえがちとなった。しかしながらあのプーンとくるアル中臭は一層高まるばかり。しかも公休日というのにひょいと姿をあらわし、何時もと同じスタイル、バケツ片手にダチョウ舎を訪れるのに私は気づいた。なるほどあのように一度でも多く、しかも手ぶらではなく、少しでもいい、同じバケツにごちそうを持って行ってやる。これだ！と思いきや、こっそりあとをつけダチョウ小屋をのぞいて私はおどろいた。

ダチョウ小屋から出てきたその長老の口元が水でぬれギラリと光っていたのである。しかもあの舌なめずりを見たのだ。

ニワトリの社会ですら群れのリーダーがあって、つねに相手をケテバシで攻撃して順位制社会をつくっているのだが、ダチョウにもまた、数羽以上となると、そうしたクチバシの〝ツツキ行為〟が見られ、はっきり強弱が観察できる。しかも、その〝ツツキ〟は群れ以外のものにも激しくむけられることがあって、ニワトリやクジャクのオスが突然我々を襲ってくることがよくある。

この〝ツツキ行為〟は巨大な足をもつダチョウの群れにもはっきり認められ、上位のものが下位のものの首や背をつつき回り一番弱いものの羽が抜け、まるはだかになった実例がある。

しかもそのような群れのリーダーはことのほか荒々しく我々にも執拗に立ち向かってきてうっかり餌も与えられない個体がよくある。かつての頃もそうであった。長老の休みに代番として餌やりにでかけた私は、何をどう



大きな雄になると頭高2.4m、背高1.4m、体重155kgにも達するという。

襲ってくるため、ひとつ、トリ目の寝こみを襲ってやれと深夜、黒装束、ダチョウ舎に近づいたが、夜の彼等は一層警戒心が強く、全速で走り回る彼等を静めるどころか、ひっくりかえった私、いやというほどすり傷をうけほうほうのていで逃げだしたことである。しかし、さらにその数日後のことだ。その吉岡さんがしゃがみこみ、雑草を抜いている姿に、ふと私は大発見をしたのであった。

それはトリの社会序列を知るとき、よく相手に無抵抗の意を示す行動として〝しゃがみ行為〟がみられる。つまりサル社会のマウントに似るあの行動だ。そのしゃがみこんだ〝人間吉岡さん〟にうしろからボスダチョウが近づき、しゃがみこみ、さかんに吉岡さんの背をつつき続けるのだった。

あっ！　これだ。私はその翌日、長老の代番の日、何時もながら襲ってくるオスに動ぜず、玉砕覚悟しゃがみこみ、草抜きをまねてみたら、どうだろう。長老のとき同様、その荒々しいオスダチョウが私に近寄ったと思ううち、巨大な足を前に投げだす格好となって座りこみ、その両足で私を狭みこみながら、さらににじみ寄ってきたのだった。

つまり、これは無抵抗でマウントを許すというダチョウ一家の交尾体位だったわけで、そのとき、そのオスのペニスを握ってやることによってザーメンの採取さえできることも知ったのである。それと同時に、長さんはやっぱりこのオスダチョウの荒々しいガードマンぶりをまことに首尾よく利用していた。マウントさせたおかげで私が小屋に入っても平気にまでなったとき、そのダチョウ小屋の片隅には、長さんの命の水にちがいないガラスコップのかぶった一升ビンが、まことに大切に置かれていたのであった。

〈王子動物園学芸員／写真も〉

してもサクの中に入れない。餌カゴもってウロウロ逃げ回るばかり。しかし、そのときのことである。ウーンなるほど、この荒々しいダチョウを、〝長老〟はまことにうまくガードマンに役立たせ、そのダチョウ小屋の中に〝宝のロッカー〟を隠したのだな！ふと私はそう勘ぐったのだ。

そこで、昼間は羽を広げ巨大なあの胸と足のキックで